

「答えは日常生活にある」

バレーボール全日本女子・中田久美監督の指導論

世界の強豪たちを相手に熱戦を繰り広げている日本バレーチーム。その日本チームを平成28年から率いてきたのが、名選手であり名指導者でもある中田久美監督です。中田さんは、どのように選手たちの心を鼓舞し、チームづくりに取り組んできたのでしょうか。

----- 答えは日常生活の中にある

久光製薬スプリングスに最初はコーチで入って、監督になったのはその翌年からでした。久光製薬というチームは、それまでも決勝に残ったりはしていたものの、最終的に勝っていませんでした。

だから私が最初にしたことは、選手のマインドをリセットすることでした。最初に「どこを目指すの、このチームは？」って選手たちに聞いたら、「優勝したい、日本一になりたい」って言うんですね。「だったら日本一になるための練習をしようよ。じゃそのために何が必要か書くね」って、書き出したんです。

それから片づけですね。というのも、体育館と隣接する合宿所の廊下に私物が散らばっていて、中にはやめた選手のタンスまで放置されていたんです。すぐに選手を集合させると、「これではダメ、日本一にはなれない。すぐ片づけなさい」と言って、各自の部屋から体育館の掃除まで当番をつくって全部一からやり直させました。

なぜそうしたかと言うと、周りの変化に気づけない人たちが、自分たちのチームの問題に気づけるわけがないからなんです。「汚い」とか「汚れてる」って気づけない人に、チームの何が気づけるんですかって話です。あいさつだって、礼の仕方だって同じです。日常生活ってすごく大事で、いまはコートの中だけちゃんとしていればそれでいいっていう風潮がありますけど、答えは日常生活の中にある、と私は思うんです。

伸びる選手の条件

多くの選手と接してきた中で、もったいないなってしまうことがあるんです。中には誰もが当たる壁に対して、チャレンジしない、逃げたりごまかしたりする選手がいるんです。

ではどういう選手が伸びるかと言ったら、「勝負どころで自分が決めるんだ」「自分がこのチームを勝たせるんだ」って思える選手だと思います。同じくらいの素質や能力を持っている集まりの中にあって最後に生き残るのは、「私の力が足りないからダメなんだ。だから力をつけるために、もっとやらなきゃいけない」って思える選手でしょうね。

それから、中学生や高校生のときに、親が指導者や学校の先生に文句やクレームを言ってきた選手も伸びません。謙虚さのない親の姿を見て育っているから社会人になっても、上手い出来ないことを人のせいにする気持ちが抜けきらないんでしょうね。

強みを生かす

私が初めて全日本のメンバーを招集した時、面談で選手たち一人ひとりに聞いたのは、「あなたの武器は何ですか？」「全日本のために、あなたは何をやってくれる？」でしたね。選手たちには、全日本に選ばれたから嬉しいというだけで終わってしまっただけは困るので、代表として果たすべき責任を口に出してもらうようにしていました。

「世界一になると本気で思ってください」と、私は選手たちに言うんです。やはり本気で思わなければ、それはただの言葉になってしまう。

本物になるってどういうことかと言うと、私は当たり前前のことが当たり前前にできる人になることを指すと思うんです。

日常生活を大切にできる人が、どんな状況にあってもコンスタントに力を発揮できる。それって外国人には難しいことなんです。だからそういった本物の選手を、代表監督として1人でも多く育てたいですね。

ふるさとの先輩から

古閑謙治さん（昭和52年3月七滝中卒業）

幼少期は、上野の「古閑の原」という集落で育ちました。遊び用具を買ってもらうようなことはなく、すべて自分で作り出すものでした。常にポケットには小刀を入れ、時には家からなたやのこぎりを持ち出し、近くの山に行き竹を切ってきては、竹鉄砲や弓、竹馬等を作って遊んでいました。また、山に行き鳥の罠をかけたり、川や天君ダムに行き魚釣りもよくしていました。その都度、どのようにしたら竹鉄砲が飛ばすようになるのか、どのようにしたら魚が釣れるのか、どのようにしたら鳥が罠にかかるのかなど、工夫を重ねていました。今になってみれば、「どのように工夫したらうまくいくのか」の考える力を培っていたように思います。地域の方々も、山に行き勝手に竹を切ったり、罠をかけたりしても何も言われず、温かく見守られ、よく声をかけていただき育ちました。

平成3年、教員として2校目で母校の上野小学校に赴任しました。そこでは、幼少期に見守っていただいた地域の方々、そして同級生や先輩後輩の方々に囲まれて7年を過ごしました。同級生のお子さんを担任させていただく機会にも何回か恵まれ、同級生からのサポートは、とても温かく心強かったことを覚えています。当時担任していた児童が今は立派な社会人として活躍していることを聞くと、うれしくなります。

平成29年には、教頭として木倉小学校に赴任しました。保護者の方々をはじめ、地域の方々も子どもたちのことを温かく見守り、たくさんの支援をいただいていることにとってもありがたく感じました。地域と学校が子どもの健やかな成長を願って協力し合うことの大切さを学ばせていただきました。

御船町の豊かな自然、温かな人情に支えられてきたことに感謝の気持ちでいっぱいです。

御船中学校の皆さんの活躍を町民の一員として応援していきたいと思っています。

